

## 「村落構造の史的分析」と村落研究の課題

(仙台) 矢木明夫

昭和廿六年夏以来、約五ヶ年の間、中村吉治教授を中心として行つてきた岩手県館山村の調査研究は、そのが一回の総合的成果として「村落構造の史的分析」を日本評論新社から今回世に送りだしたのである。この調査研究に関しては、従来多くの方々から御支援や関心を寄せられていたので、ここに謹めて簡単ではあるが、その内容の一端を御紹介し、あわせて村研の共同課題である「農家人口の変動と家族構成」について問及ある一見解を提示させていただくこととする。

本書はA5判本文九〇八頁であるが、これは從来中間報告として順次公刊してきたものに可成の補訂を行つたほか、新たに相当量の原稿を加え、全体としての体系化をはかるための調整を試みたもので、個別研究とは異つた新な総合的研究としての意図を有するものである。次に本書の内容である。これは岩手県煙山村（現在矢巾村の一部となる）の松ノ木部落の幕末より大正末に亘る時期の再生産構造を全体として五章十二節の中におさめてゐる。

について、第一章緒論、総論、調査地編、水利組織、林野利用組織、生活組織、第一章土地所有と賃租、第二章商品經濟、高橋家の商品經濟、村の商品經濟、となつてゐる。右のうち、生活組織というのを一寸説明すると、これは大体、年中行事や冠婚葬祭といつた所謂生活慣行をめぐる家の關係に中心をおいていた漠然とした呼称であるが、今後細分化されるであらう。以上のうち当然第一章に重点があかれているが、第一章のうちの総論が全体の序論にして結論ともいべき性格をもつてあり、他の部分はいずれもこゝを出发点として展開し実証して、こゝへ帰結する。次に本筋の特色、つまりは共同研究の独自性ともいふべき点についてその一端を述べる。本書は文字通り村落構造を歴史的に分析することを目指としている。最近は村落構造という主題のついた研究は決して少くない。しかし実は一向に村落構造そのものは明かにならないばかりか、実はそうした問題意識すら欠除していることもある。しかし、実は「村落構造」そのものがもつと真正面から取上げられないなければならないのではないか。こうした問題を解決することなしに、村落や共同体規

る。その中には、第一章緒論、総論、調査地編、水利組織、林野利用組織、生活組織、第一章土地所有と賃租、第二章商品經濟、高橋家の商品經濟、村の商品經濟、となつてゐる。村落構造は歴史的に変化する。それを何か自然的なものとして、あるいは景観としての現象形態だけで前提として済ましてしまうことができるだらうか。ともかく検討してもみないのである。検討を経てはじめてそうした特定の時点や形であらわれる村の位置付けや特殊歴史性が明かになる。だから、まず村をどういう社会關係であるか分析し、然る後に総合的に把握する必要がある。多様の社会關係を、自然的な混雜たる自然村落や階級構成などに單純に解消してしまうことができない。階級關係は多くの社会關係の中の一つとして、相関的に制約し制約されるものである。こうした社会關係の分析、総合という過程の中で村落そのものの本質をさぐるという方法は、当然のこととして機械的な無批判な村との対決や区分を排除する。我々はどこかで、科学的検討の対象となるべきものを逆に前提としてしまうことをさけるのである。

本分家關係ということの内容すら余りに多く無批判に前提されているのが今日一般である。ともかく、我々がどこ迄成果をあげえたかは別として、我々が意図した所は右にみたよう

な所にあつた。だから個別に分析された社会

関係が、こゝで有機的に綜合され村の本質を浮び上らせる筈であつた。しかし本書の一部には必ずしもこうした意図にそわないものも含まれてゐるかも知れない。

さて、村について右にのべたことは全く同

様に、農家人口や家族構成、つまり家の問題についても該当するのではないか。家というものを社会関係としてとらえてくるとき、何と戸籍や宗門帳の家と農業労働組織として形成される家、あるいは婚礼葬式で集つてくる家族構成などがそれてくるとか——といつた経験は誰にあつてもよい筈である。勿論そうしたものが單一なものとして一元的に一致して現象することがあることも歴史的に、地域的に可能であろう。こう考えてみると、封建社会で单婚家族が成立したと考え、その後の歴的変化も考えず、またそうしたものが常にすべての場合の家である——農業労働でも年貢負担単位としても等々——と單純にきめてかゝることがいかに誤であることとか。従つてもう少し我々はそのものを社会関係の史的な分析と綜合を通して明かにしてゆくことに重点をおいてもよいのではないか。そうした過程を通つて、家族の歴史を明かにしさ、はじめて特定の社会の人口活動に基く結構な

とを適用しうることになるのではないかだろうか。以上は古されたことでありながら、尚新な意義をもつ課題であると考へてゐる。